

## 「牡丹灯記」の受容の系譜 (一)

「牡丹灯記」は言うまでもなく明・瞿佑作『剪灯新话』（以下単に『新話』という）の中の一編である。古来『新話』を言うほどの者は必ず「牡丹灯記」にふれることを通例とする。「牡丹灯記」は紛れもなく『新話』を代表する一篇であって、異邦の志怪にして、これほどまでわが民間に関心を持たれたものも珍しい。それが近世の文学にくり返し／＼受容された様相については旧く山口剛氏の解説があった。<sup>(注1)</sup>

日本の怪談の系譜を妖しい神々の神業まで遡った山口氏の解説は時代は下って、室町時代の末には『新話』の渡来に及ぶ。まず「牡丹灯記」を書き下して紹介したあと、『奇異雑談集』の「女人死後男を棺の内へ引込こらす事」の訳にふれる。江戸時代に入ると、『伽婢子』の「牡丹灯籠」が、原話の駢麗体の美を余すことなく和文にうつしたその翻案ぶりにふれ、併せて口碑巷説まで係わらなければならぬ怪談研究のむずかしさを説きながら、その模倣踏襲のあとをたどって『雨月物語』の「吉備津の釜」に至る。かくて秋成を怪談壇上の獅子王と称えたあととは、京伝の『復讐奇談安積沼』で『雨月』の剽窃のあとを明かにし、秋成との比較をなし、さらに舞台上に眼を転じて南北の『阿国御前化粧鏡』となつて名優松助の登場となる。山口氏の解説はなおもつゞいて最後は例によって円朝の名調子『怪談牡丹灯籠』となつておわる。願みて『奇異雑

談集』を淵源とするこの「牡丹灯記」の系譜はそのまま近世怪談文学の凡その歴史でもあったのである。

戦後になつても『新話』の紹介を「牡丹灯記」の系譜をもつてするにと交りはなかった。村上知行氏の『全訳剪灯新話』（昭和二十九年・中央公論社）や飯塚朗氏の東洋文庫『剪灯新話』（昭和四〇年・平凡社）の解説も、その大方は「牡丹灯記」の受容の様相を述べることにあつた。「牡丹灯記」は確かに『新話』を代表する一篇であつて、それほどまで魅力的なものであつたのである。

その魅力が一体どこにあつたのか、それを知るには「牡丹灯記」のわが国における受容のあとをもう一度たどることから始めなければならぬ。

### 一

「牡丹灯記」の魅力それはまた『新話』のそれでもあつた。露伴が「筆力は弱いが藻絵纏麗」（『怪談』）と評したその艶かな文彩と妖しい内容とは、これに接した誰もが『新話』に肖つてわが国ぶりにうしてみたいと思つたのも蓋し自然の情ではなかつたか。山口氏が『奇異雑談集』の作者にかわつて、その時の感激をこう言っている。

太刀川 清

灯の下、しづかに新渡の書を繙とけば、ほのめく唐紙の香に人はもう海のかなたへと誘はれる。事の不思議を伝へる瞿佑の艶麗な筆は、また夢の国へとつれて行く。ふと覚めては、そのまゝ消してしまふのは惜しい歎きである。珍しい幽霊ばなしをせめてわが国ぶりにうつつして見たくなった。

そこで彼はそこから「牡丹灯記」ほか二話を手始めに翻訳するのであったと言う。

この訳者を言われるように中村某とすることに疑いがないわけでもない。しかし何人であれ、新渡の『新話』を誰よりも先立って紹介する人の感激はまさしくその通りであったであらう。

新渡に剪灯新話といふ書あり、奇異なる物語をあつめたる書なり、今二三ヶ条を取てこゝにのするなり、剪灯とは飄燭の心をきるなり、夜ふくるまでかたるといふこゝろなり、

と書き進むこの人の心のときめきが、いまにも伝わって来る思いがするのである。

瞿佑の艶麗な筆の虜はこの人ばかりでなかったのである。あの碩儒林羅山の若き日もまたそうであった。羅山には「牡丹灯詩」なるものがある、まず『新話』との奇しき出会いを前書きする。

昔日山陽才人著剪灯新話 其中有曰牡丹灯記者 庚子歲 予讀此記 則知喬生之感淫符女之妖麗 井瞿老之文章也 予始不藏此本 辛丑春 見之干書肆 而購之歸宅 其後句誦焉 朱墨点焉 握甌吟詠焉者久也矣 雖近代之文詩 而不跋及者有之 其牡丹灯者有正月元宵之事也 今日上元於是乎書

庚子は慶長五年（一六〇〇）である。この年若冠十八歳の羅山は『新話』を一読し、とりわけ「牡丹灯記」に心ひかれるところがあつた。喬生と符女の妖しいまでのあえかな交情もさることながら作者瞿佑の艶麗な文章がなんとしても魅力であつた。翌六年の春、いずこの書肆であつたで

あろうか。『新話』一本を購う機会を得て握甌吟詠して描くことがなかつた。そしてその日、恰も正月十五日、喬生符女のはじめての逢う瀬となつた上元の日に因んで羅山もまた一詩をなすのである。すなわち、

鎮明嶺下有喬生 月夜相逢符麗卿  
誰道牡丹不成事 元來精鬼在灯燵

この世のものでない二人の妖しく艶かな交情のさまに思いを駆せながら、若い羅山の心はいまだ見ることのなかつた幽冥の境へと誘われて行くのである。

羅山の『新話』の愛読は翌慶長七年になつても続く、そして、この年冬十月五日の夜、ついに読破してそれに跋を識す。

壬寅之冬十月初五於旅軒灯下而終朱墨之点 書生林信勝識之（羅山文集）

こゝでいう旅軒とはどこであつたか、ちなみに「羅山年譜」（「林羅山集付録」所収）を検すなら、壬寅すなわち慶長七年の条に、

先生二十歳 今秋泛舟 經歷西海到肥前長崎 寓居経月而帰

とある。もしこれと符合させ得るなら旅軒は長崎でのこととなる。さらに言うなら長崎在の通事にでも訊ねて難解の訓点のひとつふたつを糺すことがあつたのではなからうか。それはさておき、敢て「旅軒灯下」と識したところに『新話』に寄せた羅山の言い知れない関心が窺れ、この異国情緒の漂う長崎の旅宿で『新話』を読破することには一入のものであつたとしても不思議はない。

さらに遡ると、京都五山の禅僧周麟もまたそうであつた。周麟は字を景徐、永享十二年（一四四〇）生まれ。五歳にして京都相国寺に入り、のち各所の寺々に歴住して再び相国寺にもどつて永正十五年（一五二四）に入寂した。この禅僧の詩文集『翰林胡芦集』に「読鑑湖夜泛記」と題した七絶がある。

銀河刺上鑑湖舟 月落天孫窃夜遊

又恐虚名満人口 牛郎令有辟陽侯

この詩の左注には壬寅秋の作とあってこれを文明十四年(一四八二)とする沢田瑞穂氏の説が正しい(注2)ようである。したがって『新話』の渡来はそれ以前ということになる。その沢田氏によれば、(注3)禅僧策彦周良の入門記『策彦和尚初渡集』の天文九年(一五四〇)十月十五日に『新話』及び『剪灯余話』を寧波で購った旨の記述があること、この策彦は、その翌年帰国したから『新話』はその際、携い帰ったであろうとする、『新話』渡来の別の経緯も紹介されている。察するに『新話』はまず五山の禅林あたりで甦れ、やがて坊間に出廻ることになったのではなからうか。五山の禅僧がかかる類の文物を甦したことは青木正児氏の言うところであるが、『奇異雑談集』の翻訳もその辺りの所為ということになるうか。

二

『奇異雑談集』の作者についてはさて置き、果たしてそれが新渡第一の紹介であったか予断は許されないが、『奇異雑談集』の作者は言う。

新渡に剪灯新話といふ書あり、奇異なる物語をあつめたる書なり、今二三ヶ条を取てこゝにのする也、剪灯とは蠟燭の心をきるなり、夜ふくるまでかたるといふこゝろなり。新話とは旧剪灯夜話といふ書あり、事ふりたるゆへにあたらしき事どもをかたるゆへに新話といふなり、今唐のことばをやはらげ日本のことばになして記するなり敢て「新渡」と言う気概に本邦初訳を窺うのであるが、富士昭雄氏の紹介する東寺本の『漢和希夷』は、明かに『奇異雑談集』の古態の写本であった。それが件の『新話』について言うところは、

新渡ニ剪灯ノ新話ト云書アリ 剪灯ノ夜話ト云フニ対シテ名付ル書也 剪灯ハ蠟燭ノ心ヲ剪テ深更ニテ語ルト云名也 奇異ノ古事ヲ集メタル也

『奇異雑談集』の件の叙述はこれを敷衍したものであろうか。富士氏は「刊本のような平仮名まじりの文から、東寺本のごとき漢文体が書写・成立したとはとうてい考えられない」と『漢和希夷』の先行を説く。そう考えるのが正しかろう。もしそうなら『漢和希夷』の作者こそ『新話』の新渡第一の紹介者であり、「牡丹灯記」の最初の紹介者でもあったこととなる。その人物を富士氏は東寺所縁の僧侶と推定するが、その他のことは不明と言う。

さて両者の『新話』翻案にかゝわる件の叙述を比較するなら、「今二三ヶ条を取てこゝにのする也」と、「今唐のことばをやはらげ日本のことばになして記するなり」の二つの叙述が『奇異雑談集』で加わる。それを加えた『奇異雑談集』には明かに翻訳者としての自覚が認められ、そしてその自覚はやがて読者を意識することになる。逆に『漢和希夷』にはそうした自覚も意識もなかったことになり、好学の僧の文才にまかせた手すさび以外のなものでもなかったと言ふことになるうが、そうした態度は「牡丹灯記」の翻案でもあらわれる。

剪灯ノ新話ニ双頭ノ牡丹灯ノ記ト云物ヲ載タリ 牡丹ノ枝ノ頭ニハリタル也 唐ニハ三元下降ノ日ト云テ一年ニ三度天帝人間ノ善悪業ヲ記スルヲ祭ル也 正月十五日ヲ上元ト云 此夜ヲ元宵トモ云也 七月十五日ヲ中元十月十五日ヲ下元ト云 上元ノ夜殊ニ家ニ灯ヲ明シテ天帝ヲ祭ル也 即是七月否赴十五日ニ靈鬼ヲ祭日ニ当ル也これを「唐のことばをやはらげ日本のことばになして記した」た『奇異雑談集』では、見知らぬ風俗習慣に対する読者へのサービスピ精神が旺盛である。

唐には正月十五日の夜。家々の門にもしびをあかし、種々いぎやうのとうろをはりて、門にかくるゆへに、男女諸人は是をみて、晝にいたるまであそびありく事、日本の盆のごとくなり。是は三元下降の日といふて、一年に三度天帝あまくだりて、人間の善業悪業を記

する日也。正月十五日を上元といふ。此夜を元宵とも元夕ともいふなり。七月十五日を中元といふ。十月十五日を下元といふなり。此ゆへに唐には、上元の夜家々の門に、ともしびをあかして天帝をまつる。すなわち七月盂蘭。十五日に鬼霊をまつる日なり。

牡丹灯記 牡丹の枝のさきに、花二つあひならぶかたちを灯籠に作るなり。是を双頭の牡丹灯といふなり。

日本では馴染のない「元夕張灯」は、「日本の盆のごとくなり」と七月の盂蘭盆に擬えて理解させようとする。

かくして「牡丹灯記」が人々の前に出ることになる、『漢和希夷』が一介の僧侶の手すさびであったすれば、その意味で『奇異雑談集』は確かに新渡第一の紹介ということになるのかも知れない。いづれにせよ「牡丹灯記」のわが国の文学への影響はこのあたりから始まることになる。

三

『奇異雑談集』の訳者は「牡丹灯記」に題名を付して物語の存在を明かにした。それを刊行に際して「女人死後男を棺の内へ引込こらす事」と内容に従って名付けた。『漢和希夷』の無題から写本『奇異雑談集』の「牡丹灯の事」、そして刊本のそれと連ねてみれば、それぐのに理由がある。刊本は仮名草子の怪異小説の例にならって内容に則したものであるが、例えば、「男をとり殺す」と言った題名は見慣れても「棺の内へ引込こらす事」というのはいかにも斬新である。そこには亡女の男に寄せる愛執と怨念の交錯する異常な妖気が漂いはしまいか。その掘るところは、喬生が魏法師の戒を忘れて湖心寺に到り金蓮に呼びとめられるところである。

将及寺門 則見金蓮迎拜干前曰 娘子久待 何一向薄情如是 遂与  
生俱入西廊 直抵室中 女宛然在坐 数之曰 妾与君素非相識 偶

々於灯下一見 感君之意 遂以全体事君 暮往朝来 於君不薄 奈何  
信妖道士之言 遽生疑惑 便欲永絶 薄倖如是 妾恨君深矣 今  
幸得見 豈能相捨 即握生手 至板前 板忽自開 擁之同入 随即  
閉矣 生遂死於板中

符女は喬生の手をとって板前に行く、板の蓋は自ずと開いて、喬生を擁してその中に入る。すると蓋は閉じてしまう。怪異文学が恐怖を問題とするなら、ここは文句なく庄巻である。

しかるに『奇異雑談集』では肝腎なこの部分はなぜか省かれてしまっている。こゝを省いて帰宅しない喬生を不審に思った知音が湖心寺に赴き板中に喬生を発見する件に繋いで筋の上で滞りがない。『漢和希夷』もまた同様であったから、『奇異雑談集』は直接『新話』を参照することもなくただ『漢和希夷』をひらがな交りにしたものであったのである。

そのことから末段の三霊の供書と鉄冠道人の判詞を省くのも同様であった。大体この末段を、たゞ「道人言ヲ以テ訶責スルト良久シ三人皆伏シテ諾処」と略したのもストーリー中心の処置で、「牡丹灯記」の翻訳も要は説話的な興味からなされていたことが首肯されるのである。

さて、大きく省かれたこの二ヶ所はいずれも「牡丹灯記」の核心部分である。怪談文学から言えば前者が肝腎、言われるように亡女の邪穢と強調する道義を問題とするなら後者が必要である。そのいずれもを省いたというならこの訳者の関心は明かに牡丹灯を挑げる金蓮に前導される喬生符女の二人の妖艶な姿であり、山口氏のいう、それを彩る艶麗な筆であったことになる。山口氏は言う。

瞿佑の筆はその頃の流行を避けて、時代の言葉で典雅な趣を見せて、遠く唐代の伝奇を凌ぎ、魏晋の小説を向うにまはさうとしたのである。……駢麗体の美を限りなく發揮しようとするのが彼の苦心である。

だが『奇異雑談集』は所詮は、『漢和希夷』を和文体にかえただけのも

のであったから、故事を引き成語を駆使して含蓄に富む『新話』の駢麗体の美など俄かに訳せおおせるものではなかったのである。果たして『新話』が確かにわが国のものになるには、『剪灯新話句解』の渡来まで待たなければならなかった。

四

『剪灯新話句解』(以下単に『句解』と言う)は朝鮮の李朝明宗朝(一五四六—一五六六)林昔の集釈によるもので、『新話』の注釈書である。慶安元年の二条鶴屋町の仁左衛門版がわが国では最初であるが、これによって『新話』の読解は容易になったばかりではなく、『句解』の和訳本ともいうべきものまで出て、『新話』への関心はさらに高まるのである。

慶安年間作かと言われる『靈怪草』がそれである。ここではわが国の仏教的靈験談に併せて『新話』から八篇を採っていたが、その中にも勿論「牡丹灯記」はあったのである。訳者は池田正式、号を委斎、大和郡山藩士であったが致仕して奈良に居住し、貞徳門にあって俳諧を嗜み、和漢の学識にも秀で、かつ文才も豊かであった。

正式の訳は『新話』の本文に加えて注記をも取り入れた仮名交りのものである。

もろこし太元の世のすへつかた、台州人に方氏、名は谷孫と云ふもの兵をおこして浙東と云所にこもれり。浙東は杭州府なり。浙江道の東なれば浙東と云。其所の明州に毎年正月上元のゆふべより廿日まで 灯をとほす上元は五百也日本にて七月のうらぼんのまつりにおなじ史記に漢の世に太乙の星をまつるに、夜もすがらだんをかざり灯をつらねてまつる事有。正月七日の上元なり。今の人 灯をたつるはその事のなごりなり。此ゆふべ貴となく賤となく老少男女出てみる事おびたよし。元の末順宗帝の時、至正二十年庚子のとし喬生と云

ものあり。寧波府の鎮明嶺のふもとにおれり。はやくかたらしいつまにおくれてふかくなげき、やもめずみにて心やるかたもなく、かゝる折にも出て物見る事もせず。

傍線は仮りに『句解』の注記によるところを示したものであるが、それを巧みに行文に填めこんで本文としたもので、大方はそれで説明がつくのであるが、さらに説明が必要となれば、その語句をとりたてて注記する。たとえば喬生が湖心寺に入って符女の柩を発見するが、その傍にあった「盟器」について、

盟器ハ死人ノハフルトキ、トモヲサスルカタシロ則備ナリ。又ヒツキヲウツマズシテカリニラクコトハ、モロコシノ習ニ、他国ニテシヌレハソノシカイヲ古里ヘモチテカヘリハフルナリ。此女ノヲヤ奉化州ノ守護ニナリテアル中ニ女ソニケレハ、古里ヘトランドテカリニヒツキヲラケルトミヘタリ。

一語一句たりとも省いてはならないのがこの訳文である。したがって『漢和希夷』や『奇異雑談集』で省かれた末段の件も当然採られることになる。

ここでは、まず本文に訓点を付し、これという語句には片仮名交りで注記し、そのあと供書の概要を記すのも『句解』の通りである。

しかしそうした忠実な態度をとりながら、ひとたび喬生符女の歓楽を描く情緒的な場面となるとその態度一変して自由になる。符女を単に女と言ひ、喬生を男と言つて、その男が女を家に誘うところは、

夜もふけにければ、一夜のやどをかし給へと男とつれてたちへる。

つれたるめのわらはの名は金蓮と云をよびて、汝は帰りてあかつきにむかへに物せよといひておとこと手取かはしねやに入

ちなみに『新話』では、金蓮は符女と同道して喬生のところへ、『奇異雑談集』では同道した金蓮を端の間に控えさせる。ここでは帰してしまふりなど、それへの訳者それなりの思惑のあるところであった。そし

て、その夜も明けた後朝ともなれば、

おとこいよ／＼あはれに覚えて春の夜の明けやすきをかこち 　かた  
らいあかす。夜もやう／＼明けなんとす又此暮にはかならずとちき  
りておきわかれぬ。明ぬれば、くるる物とはしりながら、くるるを  
おそしとまぢわびぬ。くるれば頓てきたり、夜かれもせでかよひく  
る事半月ばかり

『新話』では「天明辞別而去及暮則又至如是者将半月」とあるところ、  
訳文では「明けぬればくるるものとはしりながらなほ恨めしき朝ぼらけ  
かな」(後拾遺集)の古歌を踏えるなど原話の生硬な漢文体も一転して  
馥郁とした和文脈に変えられている。このあたりはやがて出る『伽婢子』  
の翻案を思わせるものがある。

## 五

浅井了意の『伽婢子』はそれより十四、五年後の寛文六年(一六六六)  
に出た。了意は『新話』から十九篇もの多くを翻案したのであるが、就  
中「牡丹灯籠」に大きな関心を示していたことは「伽婢子」の書名がこ  
れに因んでいたことでも察しがつく。題名も一字違いの「牡丹灯籠」で  
あった。

さて、翻案は翻訳と違ってつとめて原話の漢臭を出してはならない。  
まして『奇異雑談集』のように、彼の地の風俗習慣に興味を寄せたり術  
学的になつてはならないのである。

原話の至正庚子歳(一三六〇)は日本の元文成申(一五四八)となつた。  
「新話」の成立の洪武十一年(一三七八)は、「牡丹灯籠」の時代を  
経ることわずかに十八年、不思議な物語にそれなりの信憑性と迫真性を  
求めるならいささか近すぎはしまいか。自ずと『新話』の作者の創作意  
図が奈辺にあったかを知ることが出来る。徒に信憑性や迫真性を期待す  
るのではなく、要は時代ばなれの雅文でそれにふさわしい不思議な幻妖

の世界を読者の目の前に提供すればよかったのではなかったか。了意の  
天文成申は『伽婢子』の刊行を遡ること実に百十八年、怪異を語って迫  
真性を殺ぐほど遠くではなく、信憑性を失うほどの近くでもない。序文  
に「遠く古へをとるにあらず、近く聞伝へしことを戴せあつめてしし  
あらはす」と言うところは、やはり仮名草子の怪異小説がそうであった  
ように教訓をも配慮した所為であったことが判明する。

翻案では時代、場所、人物を別の世界に移す。これによって別の文学  
を作ることも可能である。了意は原話の「鎮明嶺下」を京五条京極と、  
華やかな京の町の一画にとった。高田衛氏(益)によると「鎮明嶺下」は明州  
の町の目抜き通りだそうであるから、まさに偶然の一致という外はな  
い。原話のことはいざ知らず了意の場合は、ついで出る精霊祭の賑いを  
予定しなければならなかったからである。「元夕張灯」を孟蘭盆の精霊  
祭の灯籠としたのは、『奇異雑談集』が「日本の盆のごとくなり」とし、  
また『霊怪草』が「日本にて七月のうらぼんのまつりにおなじ」と言っ  
た先蹤があったが、さもなくも孟蘭盆の精霊祭こそ亡者の物語の時とし  
て、題名の「牡丹灯籠」にびったりするものであった。

年毎の七月十五日より廿四日までには聖霊のたなをかざり、家々これ  
をまつる。又いろ／＼の灯籠を作りて、或は祭の棚にともし、或は  
町家の軒にともし、又聖霊の塚にくりて、石塔のまへにともす。  
その灯籠のかざり物、あるひは花鳥、あるひは草木、さまざま／＼しほ  
らしくつくりなして、その中にともしびともして夜もすがらかけを  
く。これを見る人道もざりあへず、又そのあひだにをどり子どもあ  
つまり、声よき音頭に頌哥出させ、ふりよくをとる事、都の町々、  
上下みなかくのごとし。

ここには原話の面影はさらになく、すっかり京の町の精霊祭にかえられ  
ている。小町踊を彩る灯籠の飾りの中には牡丹の花もあったであろう。  
「あるひは花鳥、あるひは草木、さまざま／＼しほらしくつくりなし」と、

それとなく牡丹灯の説明をするのも忘れてはいなかった。

喬生は荻原新之丞となるが「初喪其耦。鰥居無聊。不復出遊。但倚門行立而已」という喬生とは違って妻に死別した無聊さを一層明なものにし、これに和歌まで詠ませて、そのむせぼれる心の内を表現してみせるのである。

天文戊申の歳、五条京極に荻原新之丞と云ふ者あり 近き頃妻に後れて愛執の涙袖に余り 恋慕の焰胸を焦し独り寂しき窓の下に ありし世の事を思ひ続けるに、いとど悲しき限りもなし。精霊祭の営みも、今年はとりわけ 此の妻さへ無き名の数に入りける事よと、経読み廻向して終に出で、も遊ばず、友達の誘ひ来れども心唯浮き出たず門に佇み立ちて浮れ居るより外はなし。

いかなれば立ちもはなれず面影の 身にそひながらかなしかるらむ

というところであるが、物語はその前に美女の登場となる。「牡丹灯記」の符女がそうであったように「牡丹灯籠」の女も物語の情緒の中を彷徨する女でなければならぬ。しかし了意の描いた美女は王朝時代というよりは御伽草子の恋物語の女に近かった。その容姿も動作も型通りのもので当世に生きる美女ではなかったのである。

十五日の夜いたくふけて、あそびあゆく人も稀になり 物音もしづかなりけるに、ひとりの美人、その年廿ばかりとみゆるが、十四五ばかりの女の童にうつくしき牡丹花の灯籠をもたせ、さしもゆるやかに打過る。芙蓉のまなじりあざやかに、楊柳のすがたをやかなり。かつらのまゆずみ、みどりのかみ、いふばかりなくあでやかな也。荻原、月のもとにてこれを見て、これはそもあまつをとめのあまくだりて人間にあそぶにや、龍の宮の乙姫のわだつうみより出てなぐさむにや。まことに人の種ならずと覚えて

『新話』を「唐の歌物語」と評したのは山口氏であったが、その『新話』

を翻案した『伽婢子』の文章は、翻案によくある生硬な和漢混交文ではなく、日本の物語文学の伝統そのままの優雅な和文を立て前としていた。その「唐の歌物語」には男女の恋情を詠む詩詞が随所に織り込まれては彩りを添えていたのであるが、『伽婢子』はそれを和歌にかえ、歌謡にかえて「唐の歌物語」の雰囲気そのままが国にうつそうとしたのである。それだけではなく時には原話になくとも、その場の情緒を醸し出すために必要となれば敢てそれを加えたりもする。荻原の「いかなれば」の歌も『新拾遺集』所収の寿暁法師のもので法師の詠む挽歌は亡き妻を慕う荻原の心情をあらわすに格好のものであった。

かくして荻原は女をわが家へと誘い、おきまりの交情の場面となるが、そのさまを描く文飾は和文とは言え原話をはるかに凌ぐものである。互に心の内を歌に託し、古歌を踏えた行文、今様の優雅な調べ、いずれも纏綿たる情緒を漂わすに不足はなかった。

荻原よるこびて、女と手をとりくみつゝ家に帰り、酒とり出し女のわらはに酌とらせ、すこしうちのみ、かたふく月にわりなきことのを葉を聞にぞ、けふをかぎりの命ともがなと、兼ての後ぞおもはるゝ。荻原

また後のちぎりまでやはにみまくら

ただこよひこそかぎりなるらめ

といひければ、女とりあへず、

ゆふな／＼まつとしいはゞござらめや

かこちがほなるかねごととはなぞ

と返しすれば、荻原いよ／＼うれしくて、たがひにとくる下紐の、結ぶ契りやにみまくら、かはす心もへだてなき、むつごととはまたつきなく、はや明がたにぞなりにける。

儀同三司母が藤原道隆の通って来る喜びをうたった『新古今集』の「忘れじのゆく末までよかたければけふを限りの命ともかな」による行文。

「たがひにとくる下紐の」以下の七五調は今様のリズムで流暢である。こゝは原話では「生与女携手至家 極甚歡昵 自以為巫山洛浦之遇 不是過也」とあった「巫山洛浦之遇」の故事の翻案である。『奇異雑談集』ではただ「世にたぐひなき多情なり」と訳したことを考えてみれば、了意がいかに浪漫的な世界の創造に心掛けていたかが判明するところである。だからその女もまた、そうした物語の女に相応しい出自と風情をもっていないければならなかった。女は藤原氏の末裔二階堂氏と言う歴々の息女であった。

荻原は夜毎通って来るこの女にすっかり心を奪われ密かに情を交わすが、やがてそれが隣翁によって見咎められる。隣翁は壁の隙より窺えば、荻原は一具の白骨と灯下に差向って坐っている恐しい場面を目撃する。しかもこの冥婚が禁忌すべきものであることが教えられて恐しさは一段と募るのである。

冥婚が必ずしも忌むべきものでなかったことはわが国の幽霊説話の通例であった。幽明その境を隔てゝても、これを因果の理法で結びうとする因果話では、むしろ冥界も日常に近い存在とするところに意義があったからである。このことは末段の三霊供書と道人の判詞を省くことに大きく関係することになる。

## 六

冥婚の恐しさを教えられた荻原は女の住居という万寿寺あたりを訪ねたが探し当てる事が出来なかった。探しあぐねた末に万寿寺の魂屋で女の棺と古い伽婢子見つける。「月湖の西」の原話の場所が「五条の西」に、符女が弥子に盟器婢子の金蓮が浅茅と名を書いた伽婢子に変られた位で原話そのままである。事の恐しさを知った荻原に東寺の卿君が紹介される。原話の玄妙観の魏法師である。この卿君に冥婚の邪穢を戒められ、朱符が与えられて荻原は禍から逃れたかに見えたが、五十日ほどし

て酒に酔い女の面影を恋しく万寿寺の門前に立寄るところを女の墓に引き入れられるのである。その後、雨降り空曇る夜、女の童のもつ牡丹灯笼に先導された二人の姿が見かけられ、これに逢う人々は煩うので荻原の一族が仏事を営むことで現われなくなるのである。

かつて近藤春雄氏は「牡丹灯記」を邪悪糾弾の物語と評した。<sup>(註1)</sup>そして「牡丹灯記」が亡女を語る作品としては異色の作だと言った。近藤氏にそう言わせたのは、幽鬼の出没の禍を恐れた人々が四明山の鉄冠道人に哀訴すると幽鬼たちが、道人の前に引き出され、供書も容れられず、遂に九幽の獄へ閉じこめられてしまうからである。いうなら道士の戒めを破った者への敵しい処置を鑑みてのことである。しかし「牡丹灯笼」の幽鬼たちは地獄に送られることもなく、一族が一千部の経を読み、一日頓写の経を墓に納めることで成仏するのである。この結末の作爲は了意が近藤氏の所謂異色性を斥けることで、幽明を隔てた男女のこまやかな情愛の物語を新しく創作しようとしていたことを語っている。

## 七

同じ翻案と言っても『諸国百物語』の「牡丹堂女しうしんの事」となると趣は全く異なる。翻案が事件の構成と人物の関係を動かさないものであるなら、これは翻案と言うには難があるかも知れないが、怪談としての「牡丹灯記」の核心部分は省かれることなく翻案されているのである。原話で言えば、番生が符女の髑髏と馴れ親しむところ、それに番生が魏法師の戒めに背いて湖心寺に行き、符女の柩の中に引き入れられてしまうところである。

延宝五年刊の『諸国百物語』はいわゆる百物語怪談集である。それが仮記であったにしても立前は怪談会の話の集成である。これは信州諏訪の浪人が旅の若侍と催した百物語でのものであったと序文に言う。

ことが百物語の話なら「牡丹灯記」の筋をはじめから追うようなこと



は必要なかったし、原話の元夕張灯も『伽婢子』の孟蘭盆の灯笼もここでは不要であった。

もちろんしに牡丹堂と云所あり 人しすればはこに入れ そのはこのまわりに牡丹の花をかき かの堂にもち行てかさねをくと也

この作者は「牡丹堂」なる霊屋を設けて話のはじめに据えた。勿論これは原話の「廊尽処得一暗室 則有旅櫬 白紙題其上曰 故奉化符州判女麗卿之柩 柩前懸一双頭牡丹灯」によったものである。この牡丹堂で妻を喪った男が夜毎念仏している。そこに夫に先立たれた若い女がやってくる。二人はつれだって墓を念仏してまわっているうちに懇になり、女は男の家にやってくるようになる。事の奇怪を語れば足りる怪談会では男の名も女の素姓も必要なく、ただ二人の奇怪の姿さえあればよかったのである。

となりの人ふとのぞきみれば、女のしやれかうべとさしむかいさかもりしてゐたり、夜あけてかの男にかくとかたりければ 男もおどろきその日のくるゝを待ちければ かの女またきたるをみればまことにしやれかうべ也

原話でも『伽婢子』でも、男の眼には見えなかった女の髑髏が確かに見えたとしたのは、怪談会その場の状況の反映であろうが、所詮は『伽婢子』に漂う情緒などさらになく、また必要ではなかったのである。

さて、事の次第を知った男は三年の物忌みに籠り禍を過れたかに見えたが、気晴しに小鳥を取りに出かけ、小鳥を追って牡丹堂に入行って行ったが、そのまま姿は見えなくなってしまう。小鳥は原話の金蓮と言うことになろう。

下人どもふしぎにおもひ はこどものかさねてあるを見れば、血のつきたるはこあり、このはこをうちをみければ、女のしやれかうべ、かのをとこのくびをくわへてゐたりけると也。かの女のしやれかうべ、かのをとこのくびをくわへてゐたりけると也。かの女のしやれかうべ、かのをとこのくびをくわへてゐたりけると也。か

見るべき描写とてもない この末段で、男の死にさまを「女のしやれかうべ、かのをとこのくびをくわへてゐたりける」とあるのはすさまじい。

『奇異雑談集』が「番生死してうつぶきて上になり、女はあぶのきて下にあり」と記し、『伽婢子』が「白骨とうち重なりて死してあり」と言うのと較べるなら、その凄惨な場面が印象的である。それに血の付いた箱まで点出するのも『諸国百物語』であった。

ところで、「牡丹灯」から「牡丹堂」を類推したこの作者は、或いは実際に「牡丹灯記」を見ることもなく、ただ話に聞く「牡丹灯記」をたよりに、この話を創作したのかも知れない。とすればそれほどまで「牡丹灯記」は巷間に流布していたことになり、もはや原話にたよることなく勝手にわが国の怪談集の中でひとり歩きを始めたことにもなる。されば今後はいろいろな「牡丹灯記」があらわれることになるのである。

(注1) 名著全集『怪談名作集』解説。以下山口氏の言説はすべてこの解説による。

(注2) 「剪灯新話の船載年代」(『中国文学月報』第三五号)。

(注3) 岩波版『日本古典文学大辞典』の「剪灯新話」の項。

(注4) 「本邦に伝へられたる支那俗話」(『支那文芸論叢』)

(注5) 「資料紹介漢和希夷」(『駒沢国文』第九号)。

(注6) 「百物語と牡丹灯籠怪談」(叢書江戸文庫『百物語怪談集成』月報)。

(注7) 『唐代小説の研究』第四章第二節「唐代小説と剪灯新話」。